

大鑑清規の研究

大石 守雄

清規は中國の禪定思想を宗派的に大成せしめた根本的動力である。禪宗にして若し清規の制定がなかつたならば、それは單に幽玄な哲理を玩弄する神秘主義の宗教として終り、少しも時機に即應する實際的宗教とはなり得なかつたであらう。清規は實に禪宗の生命にして、一般佛教の戒律にも比すべきものである。然して日本佛教史上、鎌倉新佛教の勃興が正法主義への反省と戒律復興への希望の二大動向を核心として展開している時、日本に於ける禪宗叢林の清規の將來を考證すると共に、臨濟宗最初の清規書「大鑑清規」を研究して見たい。

先づ文獻として現れたものは、榮西の興禪護國論卷上の令法久住門第一に、中國現存の最古の清規書と云はれる、禪苑清規（崇寧二年（一一〇三）洪濟宗贖撰述）卷一の受戒の項があり、又護國論卷下の第八禪宗支目門にも同清規の記事が見られる。興禪護國論は建久九年（一一九八）に撰述されたものである。

次いで洞宗の永平道元の永平清規があげられる。これは嘉禎三年（一二三三）より寶治三年（一二四九）に至る前後十三年間に完成したものである。道元は貞應二年（一二二三）に入宋し、嘉祿三年（一二二七）歸朝であるから、禪苑清規は勿論の事、入衆日用清規（南宋寧宗嘉定二年（一二〇九）無量宗壽撰述）が開版されていたのである。道元は或は入衆日用清規を閲覽したかと思はれるが、これに關する記事は發見出来ない。却つて禪苑清規については永平清規は當然の事、普勸坐禪儀由來書には、

禪苑清規曾有坐禪儀、雖順百丈之古意、少添贖師之新條、所以略有二多端之錯、廣有二昧汲之失、不知言外之領覽

とある。これは坐禪儀に對してのことではあるが同時に宗蹟の清規制定の態度全般にわたつて批判したものと思う。更に永平清規を大別して六つに別けることが出来る。即ち典座教訓。辨道法。赴粥飯法。衆寮箴規。對大己法。知事清規である。これ等は多くの人々によつて校訂冠註及び後に増冠傍註補註・傍解等深く研究されてゐるので、次に大要を簡述して見るに

典座教訓一篇には、その末尾に「于時嘉禎三丁酉春、記示_ニ後來學道之君子云」とある如く、歸朝後十年目の述作で、始めに禪苑清規卷三の典座の項を主材として、其の職責を論じ、更にそれを具體的に教示している。

次いで辨道法を見るに大佛寺時代寛元二年（一二四四）七月十八日より同四年（一二四六）六月十四日迄の永平寺の前稱傘松峯大佛寺時代の垂範であつて、僧堂内に於ける坐禪修行の要諦と威儀とを詳細に規定したものである。

赴粥飯法は禪苑清規卷一の赴粥飯の項に準據したもの_と推察出来る。彼の程明道が定林寺を過ぎ、偶、齋堂の威儀整齊なるを見て、喟然として、三代の禮樂盡く是に在り嘆じたと云う。粥飯二時の行法を示すものである。

吉祥山永平寺衆寮箴規は、辨道法及び赴粥飯法は凡て僧堂中心のものであるが、衆寮箴規は衆寮中心であるから、その垂訓大いに趣を異にするものがある。凡そ二十八條から成つて、和合衆の精神を基本として看讀の要心を示すものである。

對大己五夏閣梨法は、五夏十夏の年臘高き長上に對する入叢林者の威儀作法を列示せられたもので、六十二條から成つてゐる。これについて大久保道舟氏は岩波本「道元禪師清規」（二七三頁）に「斯書の資料となつたものは、直接には南山道宣の教誡新學比丘行護律儀收載の對大己五夏閣梨法（二十二條）及び事師法（五十一條）入衆法（十二條）等であり間接には馬鳴集の事師法五十頌等であらうと思う」。又此れより推して更に、「道元禪師の他の撰著とは稍、趣きを異にし禪師獨特のもの_と見るに聊か躊躇する點がある」。と述べてゐる。

日本國越前永平寺知事清規は、六知事の用心を示されたもので、その組織は全體二段の形式からなつてゐる。即ち

第一段は古來の尊宿が知事に就役して大事を發明したことをあげ、然して知事には古來有道之士の充當された實例を示し、且つ道元がそれ等の一つ一つに對して詳細な批判を加へてゐる。第二段は監院、維那、典座、直歳の四知事に關て禪苑清規の原文を擧げ、それに對して文獻的考證がなされてゐる。その上有道之士の頭首について大悟した機縁語句等までが列擧されてゐる。

また臨濟宗では、圓爾辨圓の弟子白雲惠曉であらう。それはその佛照白雲和尚語錄に百丈忌拈香偈三條を見ることが出来る。當時禪僧の入宋は大勢あつたが、それ等の人々の語錄中より發見出来るのは白雲惠曉が最初である。白雲惠曉の入宋は文永三年（一二六六）で、歸朝は弘安二年（一二七九）であり、永仁五年（一二九七）に示寂している。

此れに次いで叢林の清規の流布に努力したのは、來朝僧清拙正澄である。清拙正澄は白雲惠曉の寂後二十九年目。即ち嘉曆九年（一二三六）に幕府の招きに依て、元の國使僧として來朝した人で、始め建長寺に迎へられ、淨智寺。圓覺寺と移つて、元弘三年（三三三）建仁寺に勅請（後醍醐天皇）を受けた。住すること三年。大いに禪苑の清規を正し、大鑑清規を編纂した。これについては後程詳細に述べることとする。

百丈忌について「大鑑錄」卷一に

百丈祖忌、日本宋曾講行、今次初設此禮。百丈以前無住持、今之住持兩序、大小職任堂宇規式、皆百丈祖立之、爲長老者、不肯設忌、可謂昧本、本且不知、未溪取焉、聞之者、足以勸、

「大鑑清規」卷末の「無隱和尚墨蹟」に、

從頭講、到百丈忌段、師告予告曰、我欲斯日死何故、本朝禪林、未做百丈忌、深可歎也、

以上、「百丈祖忌日本宋曾講行今次初此禮」。「本朝禪林未做百丈忌」とあるが、白雲惠曉の百丈忌拈香偈三條より推して、清拙は渡來僧で日本の事情には熟知していなかつた爲め、斯く云つたのであらうと思う。

更に建武二年（一二三五）小笠原貞宗（泰山）公が信濃下伊那郡（松尾）の伊賀良に開善寺を始め、清拙を開山に

招請した。即ち「清拙大鑑禪師塔銘」には、

如建仁時、信州太守小笠原朝臣貞宗、領男井老幼、執弟子禮、就信州伊賀良庄梵剎一所、山名疊秀、寺曰開善、并依百丈清規行焉。

とある。清拙住すること二年、小笠原禮式を創始した。次來、所謂小笠原流の禮式は清拙が打ち出したものである。

更に「開善寺史」に、「清拙行百丈清規、泰山乃攝之、整射騎進退儀禮、是小笠原禮式發端。」とある。叢林の清規が俗人にまで普及したことであり、出世間に對する世間化であることは注目しなければならない。

所で白雲惠曉は勿論。清拙正澄の時代には未だ現存の勅修百丈清規は出來て居らず、此處に清拙が來朝（一二三六）する前に中國に於て編纂されていた清規の種類をあげて見るに。先述の「禪苑清規」「入衆月用清規」の外に、惟勉の「叢林校定清規總要」（一二七四）澤山の「禪林備用清規」（一二三二）中峰明本の「幻住菴清規」（一二三七）等がある。

清拙正澄には大鑑小清規一卷があるが、大正新修大藏經第八十一部續諸宗部十二（四）に收録されているのを見るに、元祿十年（一六九七）の刊本と今津洪嶽教授藏本の寛永二年（一六二五）の筆寫本が比較されつゝ掲載されてゐる。内容は同文にて、文字の異りを散見するのみである。唯寛永の筆寫本には卷初に「新刻清拙大鑑禪師清規叙」なる旨外太路居士の叙文は無い。即ち元祿刊本の叙文には、

又應信州刺史貞宗小笠原公之請、剎開善寺、矩護鼎新、今日諸宗葬儀、邇其餘波、謂之小笠原家禮、想禪規爲俗所掩焉。

とあるより、今日の諸宗の葬儀と清拙の清規とに關係がある様に云はれてゐる。又更に、

余曾聞諸毘耶、大雄清規蚤泯於中土、黃檗元公始親焉、傳彼、彼地禪規、蓮池尙疎、全仗中峯、此出子元公閒話、とある。隠元隆琦の時代には中國では中峰明本の「幻住菴清規」が行はれてゐたようである。「幻住菴清規」は「今

上天皇聖壽萬安」を祈る國家佛教的。「祈雨」「祈晴」等祈禱的。更に淨土教的色彩のある清規である。故に清拙の清規を中國より傳へられたものを逆に中國へ逆輸入したことを云つてゐる。

然して卷末の文に依れば、

月甫藏主衷所自謄小清規來、微予分其句讀、且加和字、便於讀、大鑑大智再世、而出中華徠日東、日東禪林禮之所缺不可不補者、衷爲小清規是也。

とあるよりして、清拙の法孫月甫名光藏主が清拙寂後百五十五年の明應三年（一四九四）に、此等十二條を集めて小清規一卷を編纂刊本にし、同じく大鑑派下の東山禪居菴清仲之に句讀を依頼して、臨濟叢林の規繩を正したものである。

處で近時、「大鑑廣清規」二卷を今津洪嶽教授が所持せらるゝのを見聞して、更に南禪寺塔頭聽松院の「大鑑清規」一卷とを比較してみるに、兩書共に筆寫本にて内容は同文である。その品目をあげてみるに、

新命受請。新住持入院。開堂祝聖。三佛忌。二祖忌。諸祖忌。嗣法師忌。四節禮儀。啓建楞嚴會。方丈小座湯。土地堂念誦。僧堂大座湯。小參。結制上堂。巡寮。秉拂。堂中三日茶禮。兩班并侍者進退。方丈特爲首座茶。諸山尊宿相訪。大掛塔歸堂。小掛塔歸堂。告香普說。且望祝聖座。且望巡堂茶。坐禪。坐參。晚參。大放參。坐禪儀。僧堂三八念誦。大帝誕生并看經勝。秉拂後管侍。入寮出寮茶。衆寮經錄借狀草。拈衣儀式。接證號儀式。座排。叢林細事。秉拂提綱叙謝法。小佛事。維那須知（出班燒香時、禮拜之法）。兩班出班拈香之法。坐具展開（禮拜之法、自謙之法、問訊之法）。僧堂衆僧須知。入祖堂式。藏主寮勝。梅檀林須知。首座寮勝（淨智寺首座寮勝）。首座寮銘（圓覺前堂首座寮銘）。侍者寮勝（相看求掛塔禮、四節日巡堂禮、四節僧堂禮）。末後事儀。精進勸、無隱和尚墨蹟。

以上を見ることが出来る。然し大鑑廣清規（今津洪嶽教授藏書）には卷末の叢林細事の品目はあるが、その内容文が

記載漏れとなつてゐる。又注目しなければならないことは、叢林細事の内容より大鑑小清規の十二條が盛られている事實である。つまり叢林細事より摘出整理されたものが、大鑑小清規の内容となつてゐるのである。その整理方法は勅修百丈清規の順序に依つてなされてゐる様にする。

大鑑小清規の品目をあげてみるに、

兩班出班拈香之法。坐具禮拜之法。維那須知法。月中毎日粥時念文。施食。僧堂衆僧須知。侍者寮勝。相看求掛搭禮。四節僧堂茶禮。藏主寮勝。乘拂提綱法。精進勸。

の十二條である。この内月中毎日粥時念文は叢林細事に無く、又叢林細事の入租堂式、梅檀須知、首座寮勝、首座寮銘、末後事儀、無隱和尚墨蹟等が摘出に漏れ、小清規には無い。此等の内、「梅檀林須知」は、その項末に嘉曆四年（一二三二）とあるよりして、建長寺に在住當時のもの。「首座寮勝」は元徳二年（一二三〇）は淨智寺に在住時、「首座寮銘」は正慶元年（一二三三）は圓覺寺に在住時のもので、「入租堂式」は、「丙子季十月」と記してあるから延元元年（一二三六）で、建長寺に在住時のもので、「末後事儀」は「己卯正月十六日記之」とあるよりして、清拙の示寂が曆應二年（一二三九）正月十七日である故に示寂の前日に記したものである。更に「無隱和尚墨蹟」は無隱元晦が貞和五年（一二三四）正月十七日に誌したものである。無隱元晦は入宋僧にて建武元年（一二三四）清拙建仁寺に住する時、第一座に招請し、清拙示寂の頃には筑前の顯孝寺に住してゐた。又「無隱和尚墨蹟」に

予白師言、不敏僻在鄉村、不歷叢林清要久矣、舉措不請法度、請師見教、即袖携禪林備用問師、

とある。當時、澤山の「禪林備用清規」が日本にもたらされて居り、行はれてゐたことが考へられる。次いで小清規にある「藏主寮勝」は「丁卯夏住山清拙花字勤白」とあるより、「丁卯」は嘉曆二年（一二三二）建長寺に在住時。「四節僧堂茶禮」の項に侍者の動作をいしめた文の終りに、「丁丑七月二十六日示」とある。「丁丑」は延元二年（一二三七）建仁寺に在住時である。「侍者寮勝」には「眞本在南禪侍者寮」とある。次に、

○日本様、古來至今錯相傳習云々。(兩班出班拈香之法)

○日本様、住持若稍不出、頭首大眾同心懈怠、此事今後不可如此、(僧堂衆僧須知)

○多有維那不依唐僧說、堅執日本古例、……殊不知、禪宗規式皆依唐法、其間有微細未全處次第改正云々。(維那須知法)

○應一切布施衆僧內照依唐例、以後爲定、維那雙分。(僧堂衆僧須知)

とあるよりして、清拙の寛容なる態度は一面自主性を畫き出してゐる。日本に於ける叢林の規式に古來より錯相傳習されてゐたものは正され、取上げるべき日本の古例は尊重する態度は叢林規式の日本化であり、戒律復興の一端であると共に、鎌倉新佛教の禪宗の當時の社會への融合化である。次いで此の一例として、月中毎日粥時念文の中に、

十三、二十七香僧堂修利祝獻、八幡諏訪新羅六所權現仰憚大眾念、十佛

とある。現今行はれてゐる「鎮守回向」の清規上に現れたる始めと云はれるべきものであらう。更に、

陞堂時、後生半分懈怠、其意謂、唐晉聽不得、不如懈怠不妨、此之謂輕師慢法、(僧堂衆僧須知)

とある。即ち上堂演法は中國語で行はれてゐたことは、渡來僧清拙のこと故に當然であるが、それに依て雲納が言葉が不明な爲に懈怠することのは妨げないが法を輕ろんじない様にいましめてゐることは、興味深いことである。

大鑑清規(聽松院本)一卷及び大鑑廣清規(今津本)は、先述の様に同文である。處で撰述者及び撰述年代は不明である。然し「無隱和尚墨蹟」の項末に

貞和戊子歲、予繼師後席、南禪重資都寺禪居雁門序首座、階來而求記於斯事、明年貞和五年歲次己丑正月十七日、建仁住持比丘無隱元晦謹誌。

とあるより、貞和五年(一三四九)頃に南禪重資都寺禪居雁門序首座の二人に依て編纂されたのではないだらうか。

然し乍ら、内容的に見るとき。座排及び狀式・勝式を見るに、座排は勅修百丈清規と同様であり、狀式・勝式の中

には「東陽五行」とか「東陽無業慈」二字諸知事同垂光降」の二記事のみ見る。「東陽」とは勅修百丈清規の編纂者である。これ依り推して、勅修百丈清規は至元二年（一三三六）に東陽德輝に依つて編纂されたのであり、日本將來は文和丙申王春初吉、前真如明千謹識、（勅修百丈清規萬治四年刊本）

とあるより、文和丙申（一三五六）に清拙正澄の弟子真如明千（一三六〇寂）に依つて刊行將來されたのである。

又東陽德輝の弟子、入宋僧中巖月用は、延文四年己亥六月、得洛之萬壽之命、七月八日、入寺、秋講勅修清規、（中巖自曆譜）

より、延文四年（一三五九）、明千の勅修百丈清規刊行に遅れること四年である。つまり文和五年（一三五六）以後の編纂ではないかと思はれる。

處が勅修百丈清規は先述二記事のみで内容の何れの項にも引用はなく、「叢林校定清規總要」（務卅清規）・「禪林備用清規」（澤山清規）・「禪苑清規」（崇寧清規）の三清規が、各項に引用、比較されてゐる。そうしてその大要は同一ではあるが、威儀作法の方法は簡略化されているのみで、叢林細事より摘出整理された「大鑑小清規」以外は、何等新鮮さを見ることは出来ない。

禪宗史上清規の刊行は必ず復興運動の一端を荷つてゐるのであるが、清拙正澄の大鑑清規は、日本に於ける臨済の宗派的完成の一翼として價值付け得ると思う。又鎌倉時代に於て臨済宗が發展せんが爲め、時の權力に押されて純禪を舉揚出来なかつた時、大鑑清拙が從來の叢林の規式に批判を加へたこと。更に、清規の世俗化を圖つたこと等大いに著眼しなければならぬことである。又勅修百丈清規を刊行した、古鏡明千を弟子に持つたことは、禪宗に於ける清規の重要性と共に、且つ又、勅修百丈清規が現代臨済宗の規式の底本となつてゐる時、ゆるがせに出来ないものがある。

彙報

昭和廿九年度實踐禪學は左の如く開講された。

碧巖錄唱 續講 山田學長

尙、接心會は六月一・二・三日及び十一月廿五・廿六・廿七日の兩回、大本山妙心寺の法堂に於て行はれた。

昭和廿九年度花園大學佛教學部 開講學科目及び講義題目

一、一般教養科目				二、體				三、專門科目				外國語			
區分	講座名	擔當者	單位	概論	實踐	實	賞	佛敎哲學	體育學(實技を含む)	梵語	梵語	獨逸語	獨逸語	英語	英語
人文	宗教學	稻岡	4	概論	實踐	三論敎學	天台敎學	實林傳	山田重	平田	平田	平田	平田	市川	川村
哲學	史學	池長	4	及特殊研究(一)	及特殊研究(二)	三論敎學	天台敎學	實林傳	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
倫理學	小笠原	4	4	〃	〃	實林傳	實林傳	實林傳	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
東洋文學(一)古文眞寶	福島	2	2	〃	〃	實林傳	實林傳	實林傳	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
東洋文學(二)莊子	福島	2	2	〃	〃	實林傳	實林傳	實林傳	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
社會學	稻岡	4	4	概論	實踐	臨濟禪の性格	布敎學	法儀實習	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
經濟學	高橋	4	4	賞	賞	布敎學	法儀實習	臨濟錄	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
自然科學概論	山内	4	4	及特殊研究	及特殊研究	臨濟錄	臨濟錄	臨濟錄	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
生物學	山内	4	4	及特殊研究	及特殊研究	臨濟錄	臨濟錄	臨濟錄	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村
化學	山内	4	4	及特殊研究	及特殊研究	臨濟錄	臨濟錄	臨濟錄	平田	平田	平田	平田	平田	市川	川村

The development of Chinese Zen.

緒方

大井

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

荻須

教育實習

味岡 3

教育心理學

富田 2

青年心理學

富田 2

社會科教科教育法

味岡 4

教育社會學

味岡 4

昭和廿八年度卒業論文一覽

禪哲學專攻

禪と現代意識について

慈珪禪の庶民的性格

拔除得勝の禪風

禪門假名法語の研究序説

禪に於ける倫理の根據

佛教學專攻

菩薩道の構造

新興宗教の庶民に及ぼせる影響

佛教に於ける實踐の原理的考察

佛教史學專攻

豊後に於ける佛教とキリスト教との交渉

丹波安國寺に就いて

明治初期の臨濟宗教園について

織豊時代に於ける大徳寺

日本中世社會に於ける近代化の挫折

世阿彌の禪

禪僧雪舟とその畫風

教團史上に於ける崇傳の地位

茶道史上に於ける元伯宗且の位置

鎌倉期に於ける教宗學僧の禪宗觀——明王上人を中心として——

禪僧と水邊畫

伽藍を中心とする妙心寺の發展に就いて

荻野獨園禪師の行蹟

我邦に於ける禪の潛流時代の一考察——義堂を中心として——

室町時代に於ける佛通寺

日本禪宗上に於ける中國禪僧の地位

師資相承論

大井令碩先生

昨年急逝せられた坂本先生の後を承けて

今同大井令碩先生を迎へることになった。

先生は數年前に一度本學の講師として佛教學を講じて居られた方である。京都大學文學部卒業後は、元東福寺管止渴室老師について長年參禪辨道を續けられ傍ら神戸山手短大の教育學助教として教鞭を取つて居られた方であり、本年度は教育原理と共に禪哲學の特殊研究として宗門無盡燈論を講

岸田 正昭

後藤 正

杉浦 宗俊

千坂 秀學

畑山 文志

橋本 稔

松葉 文弘

伊藤 秀山

木下 義海

川上 英治

堀尾 宏昭

武田 義範

以上

ぞられる事になった。

森 蘊先生

長年の念願であつた佛教美術の講座が佛教史學の特殊研究として本年度から特設せられる事になり、奈良文化財研究所建造物研究室長・工學博士・森 蘊氏が迎へられた。先生は既に桂離宮など庭園の研究者として著書も多く、その多彩な講義は、ともすれば偏し易い宗學の中に學徒の新しい關心をあつめてゐる。

學術講演會

五月廿五日、第六回本學創立記念式、記念學術講演

現代思想と禪 京都大學教授 西谷啓治

夏期公開講座

七月十日より十二日まで、會場を從來の本山大方丈から本學講堂に移して、涼しい夜氣の中で開催。熱心な來聽者は前年にも増して多く盛會であつた。蘊翁を傾けた數々の名講義に名残り惜しく三夜で散會。な

は講座題目は次の通り。

禪學研究

八八

碧巖錄提唱(三日間) 本學々長 山田無文
日本文化と禪の獨自性 久松眞一
大衆 禪 久松眞一
日本古美術と近代精神 講師 森 蘊

學 會

日本印度佛教學會 十月九日・十日兩
日東京大正大學に於て開かれたが、本學か
らは横井講師が出席。昨年、氏が宋藏遺珍
本を青蓮院本によつて補ひ、原型のまゝ騰
寫覆印せる寶林傳によつて成された研究の
一端を發表せられた。なほ題名は、
ク寶林傳本四十二章經の課題々
であつた。

佛敎史學會 十一月二十日、大谷大學
に於て開催され、荻須教授が出席、今春の
文部省科學研究費交付による延寶傳燈錄に
ついての研究の一部

「正元師燈の傳燈調承観」

を發表された。之は延寶傳燈錄の全貌を求
心的に述べられた云はゞ序説・概論であり
雑誌「佛敎史學」に掲載の筈であるが、更
に今後の日本中世禪宗史に對する決定的な
輝かしい成果が期待される。

禪學研究會

十二月一日午後一時より本學會議室に於
て昭和二十九年年度禪學研究會發表會が行は
れた。發表者は、

大鑑清規の研究 本學助手 大石守雄

關山懸玄禪師の肖像について 本學教授 荻須純道

臨濟錄の敎學的背景 本學教授 今津洪嶽

であり、森宗必總長はじめ多數出席し、盛
會であつた。

佛敎史學會

十一月十二日 卒業論文中間發表及び研究
會。指導、荻須教授。

佛敎學會

十一月三十日 卒業論文中間發表及び研究
會。指導、今津教授・横井講師。

見 學 會

十月廿九日 參加者學生八十八名、國鐵バ
ス二台に分乗出發、京都驛より森講師乘車。
先生の解説にて、藥師寺・唐招提寺を拜觀
せり。

交換受贈雜誌

龍谷大學論集。哲學會誌(中央大)。大谷學
報。哲學年報(九州大)。研究紀要(龜岡高
校)。佛敎大學學報。佛敎文化。密敎文化。
愛知學院大學論叢。奈良學藝大學紀要。神
戸外大論叢。研究集報(鈴峯女子短大)。研
究論集(信州大)。教育展望(京都府教育廳)。
在家佛敎。別府女子大學紀要。大倉山論集。
フィロソフィア(早稻田大)。研究論集(相
愛女子短大)。經濟系(關東學院大)。西京
大學學術報告人文。大阪大學文學部紀要。
アカデミア(南山大)。研究年報(三重縣立
大)。駒澤史學。宗教研究(東京大)。大阪
商業大學論集。法文論叢(熊本大)。大正大
學研究紀要。東洋大學紀要。學藝學部紀要
(和歌山大)。親鸞上人論攷。人文學(同志
社大)。佛敎文化研究。名古屋大學文學部
研究論集。群馬大學紀要。日本文化(天理
大)。風俗研究。關西大學文學論集。經濟
論集。北海道學園大。研究紀要(國道高校)。
紀要。横濱市立大。佐賀龍谷學會紀要。論
攷(關西學院大)。大谷史境。大崎學報(立
正大)。佛敎學研究(龍谷大)。教育研究紀
要(大阪市大)。金城學院大學論集。紀要(立
命館大)。京都女子大學紀要。獨逸文學研
究(京都市大分校)。龍谷史境。紀要(武庫川
學院女子大)。學術研究年報(同志社女子
大)。紀要(日本大學市田谷敎養部)。大倉